

開催地名	福井県大野市
開催日時	令和8年2月15日(日) 9:30 ~ 11:00
開催場所	多田記念大野有終会館(結とびあ)
語り部	草 貴子(宮城県仙台市)
参加者	自主防災組織 自治会 防災士 約50名
開催経緯	近年、災害は激甚化・頻発化しており、大規模災害が発生した際に行政だけで対応できる範囲には限界があり、自助・共助の力が重要と考え、地域の安全は地域が守る自主防災組織の育成と活動促進、防災意識向上を図るための取り組みを構築できればとのことから開催をいたしました。
内容	<p>◇はじめに</p> <p>私は宮城県女川町で生まれ、過去3度の自然災害を経験して今の活動に至ります。生まれて3週間後に発生したチリ地震津波で実家が半壊し、昭和61年の8.5水害では土砂災害により流され、3.11東日本大震災では津波により再び流されてしまいました。生家は3度、自然災害により失った。自分の生まれ育った街や集落、そして家や大切な人を失う悲しみは計り知れないものであり、いざという災害時に被害を最小限に抑えるためにも、防災や減災への一助になるものと信じて仙台市泉区市名坂東町内会の会長を務め次世代に伝える活動をしている。</p> <p>(1)風化への警鐘</p> <p>日本人の性格上、災害に対して発災時にはメディア報道のおかげもあり、意識や関心が熱せられるため意識が高まったかのように感じられますが、半年も経てば防災意識が薄れ、忘れ去ってしまう風化現象が起こってしまう。過去の犠牲者の供養のためにも、次なる災害に備えて被害を最小限に抑える術を身につけることが必要不可欠だ。多岐にわたる息の長い支援と、日頃からの備えを継続することが重要であると考えます。</p> <p>(2)女性目線の町内会運営と避難所開設</p> <p>私が会長を務める市名坂東町内会では、役員9名が全員女性という全国的にも珍しい組織です。働き盛りの男性が留守になりがちな地域特性を考慮し、主人の帰りを待つのではなく自分たちで守ろうという意識から、主婦の知恵を活かした防災活動を行っている。</p> <p>・集会所の建設と備え</p>

銀行ローンを組んでオール電化の集会所を建設し、多目的トイレや、プロの主婦の視点で選んだ鍋、使い捨て食器、カセットコンロ、子供用のおもちゃなどを備蓄しており、いざという時に備えている。

・東日本大震災時の対応

仙台市での震災発生時、即座に町内会の集会所を避難所として開放し、約100名の女性や子供を受け入れ、役員4名で炊き出しや運営のサポートにあたった。見ず知らずの他人と寝食を共にするストレスを和らげるため、毎日午前と午後にはコーヒータイムを設け、被災者同士が自然に会話できる環境を作るなど工夫を凝らした。

(3)被災地で露呈した課題とモラル

実際に東日本大震災時、町内会集会所を避難所として開放し、3月20日に閉鎖したが、人間の強さと弱さの両面が浮き彫りになり、人間の様々な一面が見ることができた。平時と違い精神的に不安定になる状況も否めないが、そういった非常時こそ人間の強さを試される時であり、人の気持ちを思いやることが大切であると痛感した。

・非協力的な態度

炊き出しを女性に押し付ける人や、自分勝手な要望を通そうとする人がいた。やってもらって当たり前、支援してもらって当たり前などという人間の身勝手な考えが散見し弱さが露呈した。

・ゴミ問題

震災と無関係な古いテレビや洗濯機などの粗大ゴミが集積所に捨てられており、対応に苦慮した経験がある。非常時こそ個人のモラルが問われるのである。自分勝手な考えを止め、みんなで協力する気持ちが必要である。

(4)避難所運営委員会と女性コーディネーターの役割

東日本大震災を経験し14年の時を経て、一人一人が自分の身を守る術を得た。公的組織も災害時における法的・物質的な環境整備も整い、自助や共助への考え方も進化していると考えられる。行政任せにせず、地域住民が主体となる仙台市立市名坂小学校区避難所運営委員会を平成25年に設立し事務局長を務めている。今では20もの町内会やPTAや民生委員、婦人防火クラブなどの地域団体が連携し、独自に運営資金を積み立てて備品を購入するなど、行政からの

	<p>支援活動だけでは賄えない部分にもスポットを当てて、防災活動を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性コーディネーター班 <p>大きな特徴として、女性ならではの視点を生かすため「女性コーディネーター」部門を採用し設けている。避難所でのデリケートな相談窓口、よろず相談所として機能しており、尿漏れパッドを可愛い布袋に入れて配ったり、握力の弱い高齢者のためにペットボトルオープナーを手作りしたりと、細やかな配慮を実践し提供まで行っている。主婦の知恵を出し合い、より良いものを提供できるよう日々活動に取り組んでいる。</p> <p>(5)実効性の高い避難所訓練の工夫</p> <p>我々が行う訓練は住民参加型の大規模訓練とは異なり、各班が知見を広めて実践を通じて力をつける、リーダーのための研修に近い内容で訓練を行っている。スムーズで的確な運営ができるよう、毎年手法を凝らした訓練を実施しているのである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビブスの着用 <p>運営委員全員が目立つビブスを着用することを徹底している。誰に相談すべきか一目でわかるようにすることが、情報統制にも繋がり誤った情報による混乱を防ぐことができると考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規則5箇条の掲示 <p>モラルや秩序が無い集団生活は必ずトラブルが起きてしまう。事前に取り決めをしておくことで、ある程度の秩序は守られ住民たちの生活水準は確保できる。相互理解を促すことで、自分たちの安心や安全な避難所生活を守ることを実現している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレ訓練 <p>仮設トイレを設置する訓練を実践してもらい、様々な問題点を実感してもらうことを目的としている。組み立てに40分ほど時間を要すことや、便座の位置が高すぎるが故に足が届かないことが原因で踏ん張れない、和式便器に慣れない子供たちへの配慮やプライバシー確保などの問題が浮上した。まだまだ改善しないとイケない問題が山積みである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルプコーナーと人権
--	---

	<p>聴覚障害者など、特別に配慮が必要な人が遠慮せずに要望を伝えられる環境が理想であるとする。受付とは別にタブレットを用いた筆談などの相談窓口、ヘルプコーナーを設けた訓練などを行う。</p> <p>障がい者を公にしたいくない心理や、支援する側の不安についても議論を重ね、互いの人権を尊重する運営を目指している。</p> <p>(6)持続可能な防災活動のための意識改革</p> <p>自主防災が、日々の訓練や組織作りを通して進化すると同時に、運営委員をはじめ、町内会役員といったサポート側の心の持ち方や活動範囲等も見直す必要があった。災害はボランティア精神だけでは乗り切れない。</p> <p>・運営側の負担軽減</p> <p>私の町内会の集会所では、災害発生時から24時間は町内会が所管する集会所に避難所を開設して対応、それ以降は仙台市の指定避難所へ移動を案内する対応を取っている。役員自身が自分の家庭を守ることも大切であり、役員も被災者の内の一人であるからだ。住民が「やってもらって当たり前」という意識を捨て、一人一人が当事者として行動することこそが地域防災の根底に必要不可欠であると考え、被災者全員で災害を乗り越える当事者意識をもって向き合うことが大切である。</p> <p>(7)女川町の現状とメッセージ</p> <p>私の故郷である宮城県女川町は甚大な被害を受けたのである。19メートルの津波で人口の1割を失い、街の形が全く変わってしまうほど津波が全部を壊してしまった。全てを失うということは壮絶な喪失感を生き残った人間に植え付けてしまう。</p> <p>ただ、災害を乗り越えるのも最終的には人の力がすべてであるとする。人間の無力さ、生命の尊さと儚さ、哀しみの受け止め方、人の優しさすべてを受け止め、復興への活力に変換しなければならない。震災から14年が経ち世の中は便利になる一方、被災現場で発生してしまう苦労の本質は今も昔も変わることはない。自分の地域、自分の家族を守るため欲張らず、身の丈に合った防災活動を日常の中に組み込んでいくことが重要であるとする。</p>
--	---

	
開催地より	<p>大野市はこれまで被災経験がないため、実際の体験談を聞くことで、災害に強いまちづくりや地域防災の充実・強化につなげたい。</p>